

WEB 連載 Entertainment・Essay

木村奈保子の音のまにまに

Written By NAHOK KIMURA

ブルーノートのレジェンドたちに感じる「アーティスト・ファースト」

木村奈保子の音のまにまに | 第13号

音楽映画というと、マーチン・スコセッシのような音楽的に洗練されたベテランの映画監督が撮るとは限らず、新進監督が手掛けることもあり、作品の当たり外れがある。好きなミュージシャンや音楽ジャンルに描いていても、監督の視点が甘すぎたり、浅すぎたり、使えてる映像が不足すると、ドキュメントの価値は低い。

最近の「ブルーノート・レコード ジャズを超えて」(2019.9)は、本作がデビュー作となるソフィー・ファー監督が、ブルーノート・レコーベル設立80周年を機に、その歴史を振り返る傑作ドキュメント。私はあえて劇場で鑑賞したが、思いを持つジャズファン世代の人々で、渋谷の夜の賑は全部埋め尽くされていた。



アーティストが、どうやれば受けるか、ヒットするか、儲かるか、などは考えない。ただ、演奏者のためにスタジオを準備し、心の赴くままに演奏した曲をせっせと録音していく、それだけだ。

まさに、「アーティスト・ファースト」の精神がそこにある。

「彼らは、心の真実を求めた。音楽を求める心の真実だ。心は、時代に動かされていく」

「ブルーノートのレコードを知くと、彼らが何のために、何を求めて戦っているのかわかる」

★74年発表、スティーヴィー・ワンダの名曲「Golden Lady」のカヴァーを収録したジャズ・ファンク名盤。ブルーノートからリリースされた第4作目は、「On the Avenue」でした。[Youtube: <https://youtu.be/BWVEtGc8t84>]



「On the Avenue」

映画は、若手の「ブルーノートオールスターズ」と、ジャズレジェンドのハービー・ハンコック、ウェイン・ショーターのセッションを中心に、歴代のアーティストらがブルーノートとともに歩んだ音楽の歴史を感動的なセリフで経書していく構成である。

音楽ドキュメントで好きなポイントは、集められた映像、掘り出しの音源を見聞きするほか、音楽家たちの人生哲学が、常に生き生きとしたセリフで語られるところ。彼らは「音」を主体に生きていくのに、思想や生き様も、実に深みのある「言葉」でも表現できる。

音楽ドキュメントでは、そんな表現者たちの思いが言葉で語られる魅力がある。

何より、始まりは、ユダヤ人ビジネスマンによる黒人ミュージシャンへの最大リスペクトであり、「アーティスト・ファースト」を謳う姿勢が、清く美しい。もちろん、いつまでもこの状態が続くわけではない音楽ビジネスの現実も描かれていくのだが...

私がメディアの仕事を通じて、感じたのは、日本では、「アーティスト・ファースト」が最も生かされない土壌ではないかということだ。テレビに出る、レコードを出す、ステージに出るなど、ポピュラリティーを求めるも、アーティストを年貢る企業側、スタッフ側の力こそ絶大だ。

自分で勝手にアイドルにはならないし、プロ活動にもサポートが必要だ。ビジネスマーケットのなかで、エンタテインメントのあり方は裏方により計算され、作られていく。そのなかで、エンタデイナーに選ばれた人は、その範囲でやるべきことを受け入れるか否か。

エンタデイナーを仕立て上げる裏方が、より確実なビジネス形態を作っていくことで、エンタメ界は保たれていくというビジネスセンスに、もはや疑問はないのだろう。

そうしたビジネスマンは、本作のアーティストを見て、どう思うのか。日本には、そういうアーティストはいないから、関係ない。"ということか？

かくして、日本映画のエンディングに、ビジネスマーケットで用事されたアイドルの商業ソングが、とってつけたように流れる。なぜか、監督や制作者が求めたとは思えないアイドルが、必ず一人、主演で用意される。アードかどうか、のちに、プロモーションビジネスありきの状態だ。

こうしたビジネスキャスティングで、アートの本質からはどんどんかけ離れていく。どうして、権力しかもてない凡庸な人物が、エンタメを仕切るのか？才能、センスのないスタッフが、アーティストと客の間に存在すると、賞が落ちると考えるのは私だけではないだろう。スタッフは、アーティストのファンであってほしい。

私が、映画の番組制作を始めたとき、演出スタッフとして、「俳優・ファースト」を貫いたことだけは、間違っていないかったと思う。

一方、自分が出演する番組を散れ切れないほどこなしてきたが、素晴らしいスタッフは、能力があっても、「出演者・ファースト」で、影になってサポートをするタイプの人であり、歓迎できないのは、仕切りたがりの権力志向の人である。

現場のディレクターやプロデューサーで、権力しかもてない凡庸な人物がいる。彼らが出演者に付随され、勘違いすると、個人的な能力に溺れ、文化基準は下がる一方だろう。

昨今、さらに問題となっているのは、報道番組の制作スタッフや出演者の気負い失われかねないほど、権力者たちの支配が見え隠れしている状況だ。

アートもジャーナリズムも、心の真実に向かうべきだ。そういう人々の側は、例え自己の人生にすぎずあっても、汚れていない。他方、権力で権に染みつかうと、その醜態は、隠しようもなく悪い。心がけが顔に出るという美醜問題も昔は気づかなかったが、最近とみにそれを感じるようになった。

さて、映画の予告編にも使われた、ブルーノートのミュージシャンについての印象深いセリフを再度、紹介する。

「彼らは、心の真実を求めた。音楽を求める心の真実だ。心は、時代に動かされていく」

「ブルーノートのレコードを知くと、彼らが何のために、何を求めて戦っているのかわかる」

何かを求めて戦うことの美しさを、ブルーノートのレジェンドたちから感じ取りたい。

『ブルーノート・レコード ジャズを超えて』

マイルス・デイヴィスからノラ・ジョーンズまで、80年にわたりジャズをリードしつづける革新的なレーベル「ブルーノート・レコード」。レアなアーカイブ映像、そして歴代のブルーノートのアーティストたちや、レーベルと密接に関わった人々との対談を通じて、80年にわたり世界中の音楽ファンを魅了しつづけるジャズ・レーベルの真実に迫る傑作ドキュメンタリーだ。



★Bunkamura J・シネマ 上映スケジュール★

◆10/10(木)までは上映予定

[~10/3(木)] 10:30 / ★20:45~ (終) 22:10

[10/4(金)~10/10(木)] 11:00 ~ (終) 14:40

★マークのある回は予告編なし、本場からの上映

https://www.bunkamura.co.jp/cinema/lineup/19_bluenote.html

NAHOK Information



私の近況

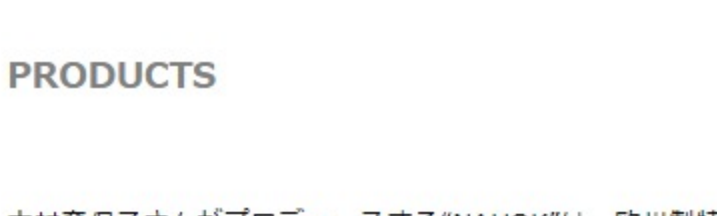
私の美籍フェア関係者、ジャズ・ファンクのレジェンド、フィル・アップチャーチさんの自宅に集合。楽しいメロディが響き、美籍の歌手、ソーニヤさんもウォール参加をしてくれというのに、あることが、私だけが当日無断で出て、ダウンしました！！やはり、津波は許さないのである〜！！



NAHOK&PHILL



PHILL UPCHURCH
&Yutaka Sasaki (NAHOK Adviser, Drummer)



PHILLと美さんと

PRODUCTS

木村奈保子さんがプロデュースする「NAHOK」は、欧州製特殊ファブリックによる「防水」「通気透湿」「電磁吸収」機能の楽器ケースで、世界第一級の演奏家から愛好家まで広く愛用されています。 <https://nahok.com>

WEB限定 リュック式 エレキベース ギグケース

「Black Bird/wf」

セミハードレベルのプロテクションケース。凹凸のある裏面素材で、高級感をより際立たせた大人の黒ツヤなし。厚手ならではののどろり感が魅力です。



マッドブラック

WEB限定 リュック式エレキギター ギグケース

「The Expendables 2/wf」

セミハードレベルのプロテクションケース。シルバーコーティングが美しいスーパーバライト。近未来のイメージに仕上げています。(マダ部・後ろ側はマッドブラックを使用。)



シルバー/マッドブラック

製品の特性：ドイツ製純天然水生地&湿度調整調整素材 with 止水ファスナー

生産地：Made in Japan / Fabric From Germany

問合せ&詳細は[NAHOK.com](https://nahok.com)サイトへ

>>>BACK NUMBER

第1回：平昌オリンピックと音楽 | 木村奈保子の音のまにまに | 第1号

第2回：MeTooの土壌、日本では？ | 木村奈保子の音のまにまに | 第2号

第3回：エリック・クラプトン〜サウンドとからむ生きざまの物語〜 | 木村奈保子の音のまにまに | 第3号

第4回：津波の力マリー、名匠高橋竹山の物語

第5回：ヒロイクメ女たち | 木村奈保子の音のまにまに | 第5号

第6回：アカデミー賞2019年は、マイノリティーの人物運動と音楽/ワー

第7回：知るべきすべては音楽の中に——楽器を通して自分を表現する

第8回：美術ではなく感性で動くことから文化が高まる

第9回：女性の音楽に、なぜ目をつぶるのか

第10回：思いあふれて.....振り下げて深める音楽愛

第11回：PRAY FOR KYOANI「けいあん」を聴いて

関連記事 |

★平昌オリンピックと音楽 | 木村奈保子の音のまにまに | 第1号

★MeTooの土壌、日本では？ | 木村奈保子の音のまにまに | 第2号

★女性の音楽に、なぜ目をつぶるのか | 木村奈保子の音のまにまに | 第9号

★知るべきすべては音楽の中に——楽器を通して自分を表現する | 木村奈保子の音のまにまに | 第7号

★ヒロイクメ女たち | 木村奈保子の音のまにまに | 第5号

★エリック・クラプトン〜サウンドとからむ生きざまの物語〜 | 木村奈保子の音のまにまに | 第3号

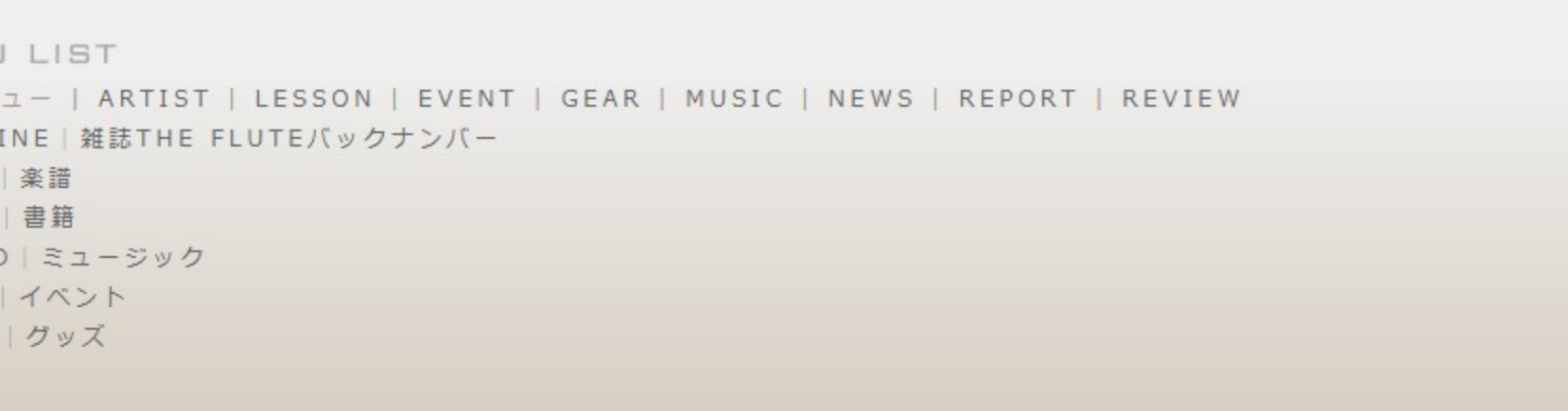
★看板ではなく感性で動くことから文化が高まる | 木村奈保子の音のまにまに | 第8号

★思いあふれて.....振り下げて深める音楽愛 | 木村奈保子の音のまにまに | 第10号



Cover Story

ALSO ONLINE FLUTE GOODS



フルートのコンサート情報をお届けします。



THE FLUTE お知らせ



THE FLUTE vol.174
THE FLUTE | シンクタンク
FLUTE CLUB入会・更新はこちら
フルート家画一覧

ENTRY 投稿・応募
>>> THE FLUTE アンケートへ

